

ふじづかいせき  
**富士塚遺跡**

2010年3月

長野県飯田市教育委員会

ふ じ づか い せき  
**富士塚遺跡**

2010年3月

長野県飯田市教育委員会



## 序

私たちの飯田市は、中央アルプスと南アルプスに挟まれた伊那谷の南部に位置し、古くから交通の要衝として栄えてきました。そして、美しい自然に恵まれ、長い歴史と貴重な伝統文化に包まれた、人情豊かなまちとして知られています。

遺跡がある伊賀良地区は、飯田市街地からおよそ3km南西に位置し、西側の木曽山脈前山を源流とする幾つもの河川によって形成された広大な扇状地が広がる地域です。このような地形を利用して、私たちの祖先は生活を営み、その痕跡が遺跡として現代に残されてきています。これらは私たちの地域社会や文化を形作ってきた様々な証であり、できる限り現状のままで後世に伝えていくことが現代に生きる我々の責務もあります。

今回調査を実施した「富士塚遺跡」では、過去の調査で縄文時代後期の土坑群・中近世の小穴群等が調査されています。そのような場所ゆえ関係各機関と協議の結果、工事実施に先立つ試掘・発掘調査を実施し記録保存を図ることとなりました。

調査結果については本文に述べてあるとおりですが、今回の調査では縄文時代中期後葉の集落の一部が確認され、地域の歴史を知るうえで貴重な成果をあげることができました。失われる埋蔵文化財を記録保存という形で残すことは次善の策ではありますが、この成果が地域の文化的資源として有効に活用されることを節に願います。

最後になりましたが、調査の実施にあたり文化財保護の本旨に多大なるご理解とご協力をいただきました関係機関及び地域住民の皆様、そして発掘・整理作業に従事していただいた皆様に深く感謝を申し上げます。

平成22年3月

飯田市教育委員会

教育長 伊澤宏爾

## 例　　言

1. 本書は一般道路改良事業　道路改良工事　市道伊賀良32号線　飯田市伊賀良大瀬木　建設に伴い実施された飯田市伊賀良大瀬木所在の埋蔵文化財包蔵地富士塚遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、飯田市建設部土木課からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。

3. 調査は、平成20年度に現地調査を、21年度に整理作業及び報告書の刊行を行った。

4. 現地での調査は下平博行が担当し、整理作業は坂井勇雄が担当した。

5. 発掘調査及び整理作業にあたり、図面類、遺物の注記には「FJT」の略号を、遺構には以下の記号を用いた。

竪穴住居址-SB　土坑-SK

6. 富士塚遺跡における発掘調査位置は、国土基本図の区画LC83-19-13に位置し、グリッド設定は飯田市埋蔵文化財基準メッシュに基づいて㈱エムツークリエーションに委託した。

7. 本書の遺構記載は、竪穴住居址、土坑の順に記載してある。

8. 上層の色調・土性については、小山正忠・竹原秀男2005『新版標準土色帖』を用いている。

9. 土器実測の一部については、㈱シン技術コンサルに委託した。

10. 遺物実測の縮尺については、下記のとおりである。

土器　復元実測図1／4　　拓本及び断面1／3　　土製品1／3

石器1／3　　2／3（石鐵）　1／2（石匙）

11. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により坂井勇雄が行った。

12. 本書は、坂井勇雄が執筆・編集し、山下誠一が校閲した。

13. 現場での遺構写真は調査担当者が撮影し、遺物写真撮影は西大寺フォト杉本和樹氏に委託した。

14. 本書に関連した出土遺物及び図面写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市上川路1004-1  
飯田市考古資料館で保管している。

# 目 次

## 本文目次

序	
例言	
目次	
第1章 経過	
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査組織	1
第2章 遺跡の環境	
第1節 自然環境	3
第2節 歴史環境	3
第3章 調査の結果	
第1節 調査の概要	9
第2節 遺構・遺物	9
第4章 まとめ	
第1節 石匙を伴う土坑37	19
第2節 集落の様相	20
第3節 おわりに	20
報告書 抄録	31

## 表目次

表1 土坑觀察表	11
----------	----

## 挿図目次

挿図1 調査遺跡位置図	(6)
挿図2 基準メッシュ調査位置図	6
挿図3 調査位置及び周辺遺跡地図	7
挿図4 遺構分布図	8
挿図5 基本層序	9
挿図6 SB01	9
挿図7 SB02	10

挿図8 SB03	10
挿図9 SK37	11
挿図10 SK27~35・38~40	12
挿図11 周辺ピット図1	13
挿図12 周辺ピット図2	14
挿図13 周辺ピット図3	15
挿図14 SB出土土器	16
挿図15 SB・SK・遺構外出土器	17
挿図16 SB・SK・遺構外出土石器	18

## 写真図版目次

図版1 調査区全景（北側）	21
図版2 調査区全景（南側）	22
図版3 SB01・02	23
図版4 SB03・SK37	24
図版5 SK27・32・39	25
図版6 各種作業風景	26
図版7 SB01・02	27
図版8 SB02・SK27	28
図版9 SK37	29
図版10 SK37・遺構外・石器	30



挿図1 調査遺跡位置図

# 第1章 経過

## 第1節 調査に至るまでの経過

平成20年1月17日付で長野県教育委員会教育長より平成20年度以降実施予定の公共事業等に係る埋蔵文化財の保護についての依頼があり、平成20年度以降に計画されている事業の照会がなされた。

その結果、飯田市建設部土木課より飯田市大瀬木3558-2他における市道新設の計画が提示された。当該地は埋蔵文化財包蔵地富士塚遺跡の一画に位置するため事前に試掘調査を行い、本調査実施の判断をする事となった。

平成20年10月15日に試掘調査を実施した結果、計画地南側は耕作による搅乱が著しく遺構は確認されなかったが、北側部分を中心に縄文時代中期の住居址・土坑等が検出された。よって、遺構が残存する北側部分の総延長およそ50mに関して発掘調査を実施することとした。

諸協議の後、平成20年11月17日、飯田市建設部と飯田市教育委員会との間で、富士塚遺跡発掘調査業務委託負担協定を締結し、同日より発掘調査に着手した。

## 第2節 調査の経過

発掘調査は、平成20年11月17日から同年12月26日まで実施した。調査範囲が南北に長く用地の幅も狭いため、発掘調査は北側と南側の2回に分けて実施することとした。北側は平成20年11月17日より重機による掘削を行い、同日(㈱)エムツークリエーションによる飯田市埋蔵文化財基準メッシュに基づく基準点設置作業を実施し、翌日より作業員を入れて調査に着手した。発掘作業は遺構検出・遺構掘り下げ作業・測量・写真撮影を行い、北側部分の調査を12月3日に終了させた。南側部分は12月4日・8日に重機による掘削を行い、基準点設置後9日より発掘作業を開始した。北側部分と同様な作業を実施し、12月17日に現地での発掘作業を終了し、26日に重機による埋め戻しを行った。

整理作業については、平成21年度に飯田市考古資料館で実施した。出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業・遺物実測・第二原図作成・トレース・版組等の作業を行い、発掘調査報告書を刊行した。

## 第3節 調査組織

### (1) 調査団

調査主体者	飯田市教育委員会	教育長	伊澤 宏爾
調査担当者	下平 博行	坂井 勇雄	
調査員	山下 誠一	瀧谷 恵美子	羽生 俊郎
作業員	伊東 裕子	金井 照子	唐沢 古千代
	杉山 春樹	関島 真由美	竹本 常子
			小平 まなみ
			椎名 祥二
			中村 地香子
			仲村 信

中平 けいこ 中田 恵 服部 光男 林 伸好 福沢 育子  
松本 恵子 森藤 美知子 森山 律子 宮内真理子 吉川 悅子

## (2) 事務局

### 飯田市教育委員会

教育次長	関島 隆夫
生涯学習・スポーツ課長	宇井 延行
文化財保護係長	山下 誠一
文化財保護係	宮澤 貴子 濃谷 恵美子 下平 博行 坂井 勇雄 羽生 俊郎

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 自然環境

伊賀良地区は飯田市西部にあり、飯田市街地の南西に位置する。北側は鼎地区、東側は松尾・竜丘地区、南側は山本・三穂地区に接する。

飯田市は南アルプスと中央アルプスに挟まれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天龍川が南流する。天龍川に平行する河岸段丘地形を特徴とするが、両山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴い盆地・大きな段丘崖が形成された結果であり、複雑な段丘地形を呈している。伊賀良地区の場合、西側と東側で大きく地形が変化している。西半は中央アルプスの前山である笠松山・高島屋山東山麓にあたり、飯田松川・茂都計川をはじめ、笠松山・高島屋山から流れ出す入野沢川・南沢川・滝沢川・新川等の河川によって形成された広大な扇状地が広がる。扇端はおおむね北方地籍では新井付近、大瀬木で伊賀良小学校付近、中村の長清寺付近であり、これより西側は傾斜の比較的急な斜面となっている。扇端の一部は前述の様を大きく越えて東側に伸びており、下殿岡地籍まで達するものもある。扇端付近では通常の如く湧水が豊かであるが、この扇状地が小河川により幾重にも複合して形成されているため、比較的湧水に恵まれて、今日でも横井戸を利用している住宅がみられる。扇状地の形成に大きな役割を果たした小河川は現在は堆積作用より下谷作用に転じているが、浸透力は弱く、開析谷の規模は比較的小さい。これに対し、地区の東側は基本的には高位の段丘面を占めており、扇端から離れるほど地下水位が低くなる。古代末以来、この高燥な地帯への井水の開削が繰り返し行われ、大井をはじめ多くの井水が開けられているほか、地区内の大小河川には人為的な改変が加えられてきた。

富士塚遺跡は、笠松山系の支陵から連続する微高地の北東緩斜面上に位置し、遺跡の北側は臼井川の上流部にあたり、川幅も狭く、谷もそう深くない。また、調査地点の南側500mを茂都計川が東南東に流れしており、深く開析している。本遺跡は、比較的陽当たりの良い緩斜面に位置し、集落を営むのに適した所といえる。

### 第2節 歴史環境

伊賀良地区は埋蔵文化財包蔵地が濃密に分布しており、これまで発掘調査がなされた遺跡は、学術調査による立野・山口・西の原の各遺跡、中央自動車道建設にかかる与志原・上の平東部・寺山・六反田・大東・酒屋前・滝沢井尻・小垣外・三壺渕・上の金谷の各遺跡、一般国道153号飯田バイパス建設にかかる殿原・八幡面・小垣外の各遺跡、広域農道西部山麓線建設にかかる飯田垣外・火振原・梅ヶ久保・細田北・北方大原・直刀原・河原林・入野・北方北の原の各遺跡、諸開発に伴う中島平・宮ノ先・鳥屋平・下原・高野・公文所前・中村中平・増泉寺付近・三尋石・富の平・富士塚・中川・経塚原・樋口・はりつけ原の各遺跡があり、遺跡数、調査事例ともに多い地域である。

こうした文化財に表れた先人たちの足跡は縄文時代早期まで遡る。立野・山口遺跡といった縄文時代早・前期の遺跡は主に笠松山麓の比較的標高の高い所に立地している。前期終末では辻垣外・殿原遺跡等の扇状地扇端付近の遺跡で竪穴住居址が調査されている。中期の遺跡は伊賀良地区の広範に分布して

おり、中央自動車道・西部山麓線路線にかかる扇状地上の諸遺跡や下原・公文所前遺跡といった段丘上の遺跡がある。殊に北方大原・下原・増泉寺付近・三尋石遺跡では、該期中葉から後葉の大集落の一画が調査されている。後期中葉から晩期にかけては、茂都計川に面した中村中平遺跡で、配石址・竪穴住居址・配石墓等の遺構や土偶・土製耳飾り・石棒・石剣を含む多量の遺物が調査され、不明な点が多くあった該期の様相が解明されると期待されている。また、酒屋前・辻垣外・殿原遺跡で断片的な資料ではあるが遺構・遺物が確認されている。

弥生時代においても集落立地は基本的には繩文時代と変わらないと考えられるが、前期・中期についてはなお不明である。後期になると遺跡数が増加すると共に調査例も増す。これまで調査された遺跡としては、大東・上の金谷・酒屋前・滝沢井戸・宮ノ先・中島平・中村中平・櫛口・はりつけ原遺跡等がある。該期の集落展開としては、扇状地末端の湧水線及び西方前山から東流する大小河川を利用した水田經營と高位段丘上での陸耕を基盤とするものが考えられる。殿原遺跡ではこれまで90軒にのぼる竪穴住居址が調査される等、大規模な集落が営まれていたことが判明している。また、細田北遺跡では標高700mを越える高所から2軒の竪穴住居址が発見されており、人口の爆発的な増加とこうした高所にまで生産基盤を拡大するまでに至る生産力の向上を看取できる。

古墳は伊賀良地区では52基が確認されているが、現存するものは9基にすぎない。隣接する竜丘・松尾地区に比べ数も少なく、いずれも規模の小さい円墳である。また、該期の集落址の調査例は少なく、中期の上の金谷・富の平遺跡・後期の三箇瀬・中島平・中村中平遺跡が調査されているのみである。遺跡数も前時代に比べると著しく減少しており、湧水・湿地を控えた集落の展開が考えられる。中村中平遺跡は、遺跡北側の台地の縁に大名塚古墳が現存し、ほかに消滅したものとして中村孤塚古墳・寺畠古墳・宮原2号古墳があり、これらの築造を担った集落であろう。また、地区内北方地籍には条里が敷かれたとも指摘されており、水田經營の定着した姿を想定する事ができよう。

奈良時代については、具体的な遺構・遺物の調査例は中村中平遺跡のみであり、掘立柱建物址が単独で調査されたのみで、詳細は不明である。地区内には、古代東山道の経路及び「育良駅」の推定地や、莊園を構成する村落の起源等に関連すると思われる個所があり、重要な役割を果たした地区という事ができる。

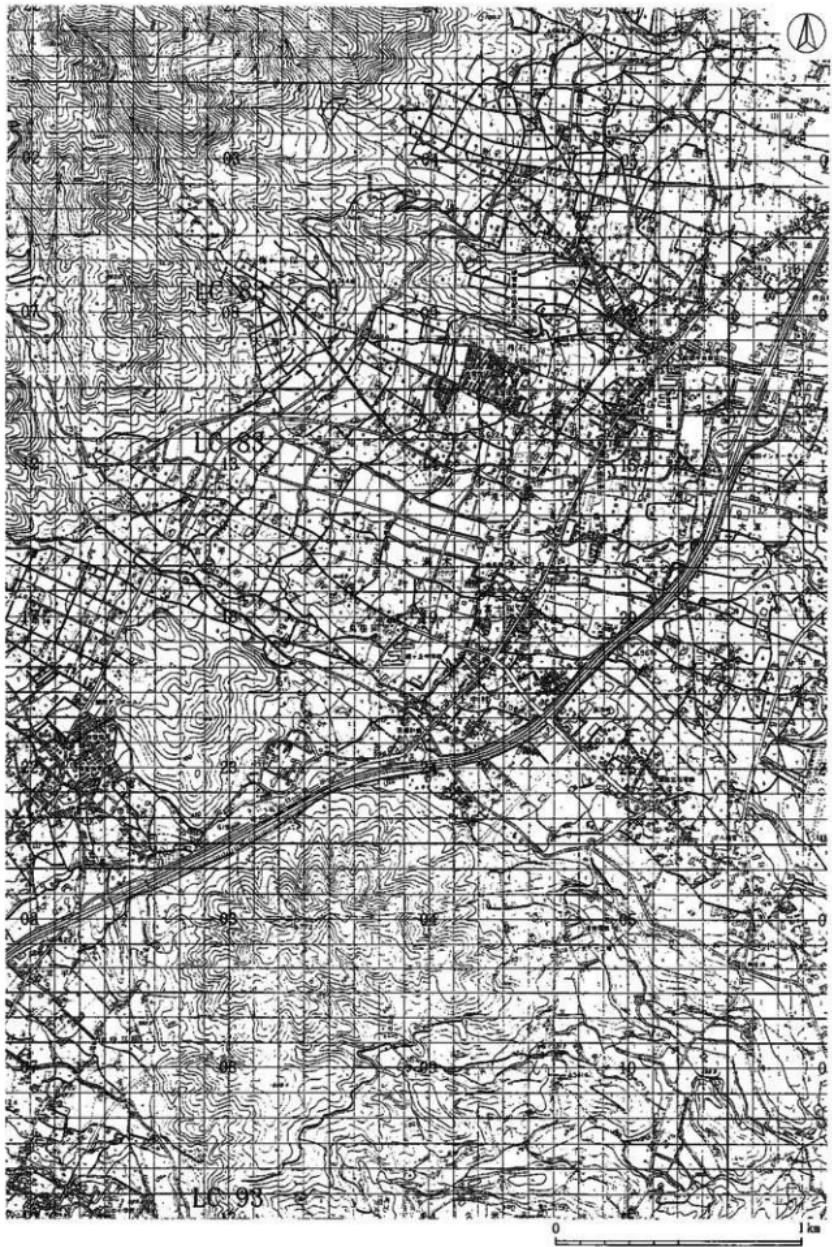
平安時代については、その末期に伊賀良庄の名が文書に登場する。その中には中村・久米・川路・殿岡が含まれる事が文献等により明らかにされており、当地区がその中心的な位置を占めていた事が考えられる。当地方における大規模な井水開発の歴史は、この時代に始まるともいわれている。殿原遺跡の調査結果はこうした説をある程度裏付けるものといえる。一方、これまで実施された発掘調査の結果、六反田・滝沢井戸・小垣外・三箇瀬・上の金谷・宮の先・公文所前遺跡等地区内のほぼ全域にわたり、集落址の一部が調査されている。伊賀良庄の成立がどこまで遡るかは不明であるが、この時代の集落が前時代よりも増加する事はこの地区的開発が一段と進んだ証拠であろう。隣接する山本地区の久米には真言宗の古刹光明寺がある。胎内に「保延六(1140)年」の銘をもつ薬師如来坐像がある事から、寺の創建はこれより遡ると考えられ、伊那谷の中ではいち早く中央の文化を取り入れた先進地域の一つであったと思われる。さらにこの時代には三日市場地籍に須恵器を生産した土器（かわらけ）洞窯跡があり、ここで生産された須恵器が下伊那全地域に分布するなど、手工業生産の発達が見られる。

中世においては鎌倉時代に北条時政が伊賀良庄地頭であり、以後一族の江馬氏がこれを継いだ。その

地頭代が地区内に居を構えたことは疑いなく、鎌倉末期には莊園を自領化していたことが三浦和田文書に窺える。この時代の文化財としては、藤原様式の流れを汲む鎌倉初期の光明寺の阿弥陀如来坐像（国指定重要文化財）がある。

北条氏の滅亡後、信濃守護職小笠原氏は伊賀良庄を与えられ、その下で伊賀良地区の開発は急速に進んだとされる。地区内の井水の大半はこの時代の開発と考えられ、小笠原氏の勢力伸長の基盤として当地区が大きな役割を果たしたといえる。室町時代中期以降、小笠原氏の支配拠点である松尾城・鈴岡城の支城が各地に築かれ、地区内には下の城跡・桜山城跡・三日市場城跡などがある。

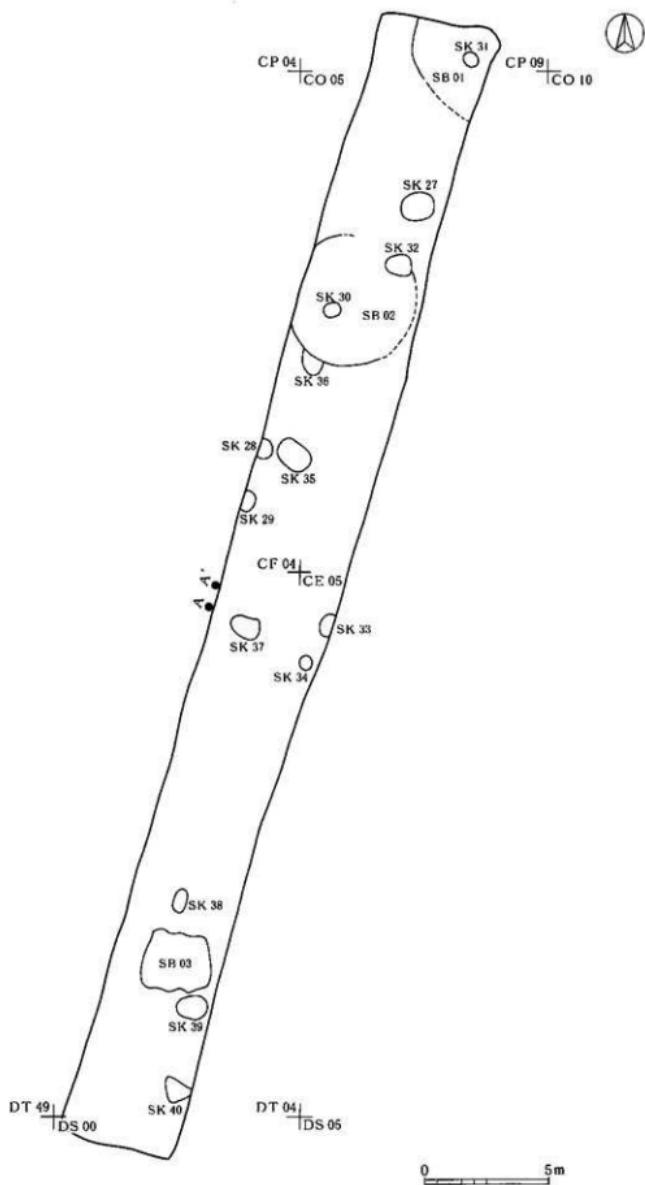
以上、各時代について概観したが、こうした歴史の脈絡の中で、今次調査の成果がどのように位置付けられるかは、本書の内容により明らかにされるといえる。



挿図2 基準メッシュ調査位置図



挿図3 調査位置及び周辺遺跡地図



挿図4 遺構分布図

# 第3章 調査の結果

## 第1節 調査の概要

### (1) 調査地

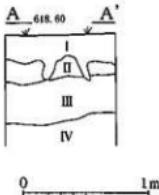
今次の調査地は飯田市大瀬木3558-2番地他で、調査前は農地であった。調査面積はおよそ230m<sup>2</sup>である。

### (2) 調査区の設定（挿図2）

調査区の設定は、世界測地系に基づく新飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図により設定した。今次調査区は、LC83 19-13に位置する。

### (3) 基本層序（挿図5）

調査時の現状地盤である耕作土（I層）の下層でローム漸移層（II層）、ソフトローム層（III層）、ハードローム層（IV層）が堆積しており、III層上面が遺構検出面となる。



挿図5 基本層序

## 第2節 遺構・遺物

### (1) 住居址（SB）

①SB01（遺構－挿図6 遺物－挿図14・16 写真図版3・7・10）

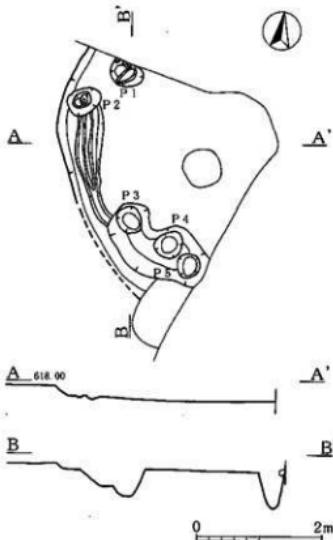
調査区の北端CP08を中心検出した。SK31に切られる。遺構の大半が調査区外のため全体の2/3を調査した。平面形は直径6mほどの円形が想定されるが、主軸は不明である。壁は緩やかな立ち上がりで、検出面からの深さはおよそ13cmである。周溝は西側壁付近で一部確認された。床面上には幾つかのピットが検出されており、P1・P3は主柱穴の可能性が考えられる。炉址は不明である。

遺物は覆土下層を中心に土器の小破片、打製石斧、横刃型石器、石錐等が出土している。

時期は出土遺物より縄文時代中期中葉末が想定される。

②SB02（遺構－挿図7 遺物－挿図14・15・16 写真図版3・7・8・10）

CK06を中心検出した。SK30, 32, 36に切られ

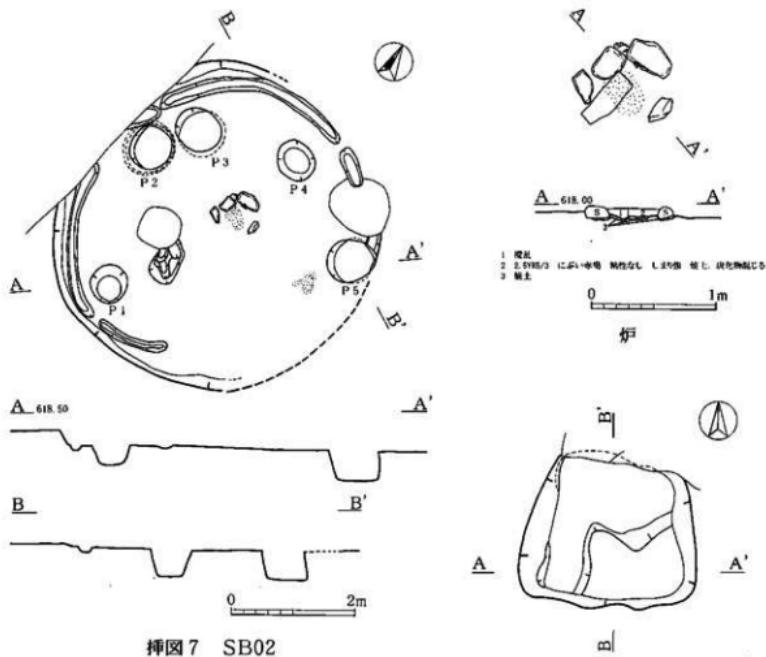


挿図6 SB01

る。北西側の一部が調査区外となり、南東側の床面が一部削平されているがほぼ全体を調査した。平面形は直径5mほどの円形を呈し、主軸はN29°Wを示す。壁は緩やかな立ち上がりで、検出面からの深さはおよそ30cmである。周溝は削平部を除いてほぼ全周している。主柱穴と思われる柱穴はP1・P2・P4・P5の4基である。炉址は中央やや東寄りに作られた石囲炉で、90×68cmの方形を呈する。擾乱により部分的に壊されているが、炉縁石の一部が残存している。

遺物は覆土下層を中心に出土しており、復元された土器には口縁部に襷曲文的な隆帯を持つ深鉢等（挿図14-5・6）がある。その他には土偶、打製石斧、横刀型石器等が出土している。

時期は出土遺物より縄文時代中期後葉が想定される。



### ③SB03（遺構－挿図8 写真図版4）

DW02を中心に検出した。平面形は方形を呈し、主軸は不明である。壁はやや緩やかな立ち上がりで、検出面からの深さはおよそ51cmである。床面の南東部が若干高くなっている。ピット等の屋内施設は確認されず、半地下式の建物遺構が想定される。

遺物は中世から近世にかけての陶磁器小片が出土している。

時期は中世以降と思われるが不明である。

挿図8 SB03

## (2) 土坑 (SK)

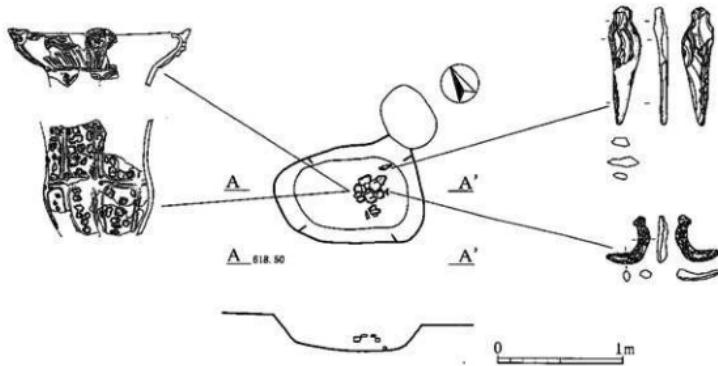
今次調査区からは縄文時代中期中葉から後葉と考えられる土坑が14基検出されている。大半の土坑は少量の土器片が出土したのみである。このうち特徴的な土坑について記載し、その他の土坑に関しては下記の土坑観察表を参考にされたい。

### ①SK37 (遺構一挿図9 遺物一挿図15・16 写真図版4・9・10)

CD03を中心に検出した。平面形は長径118×短径80cmの橢円形を呈し、検出面から底面までの深さはおよそ22cmである。

遺物は底部付近よりほぼ1個体の深鉢（挿図15-10・11）と、黒曜石製の石匙（挿図16-9）・綠色岩製の粗製石匙（挿図16-8）各1点がまとった状態で出土している。

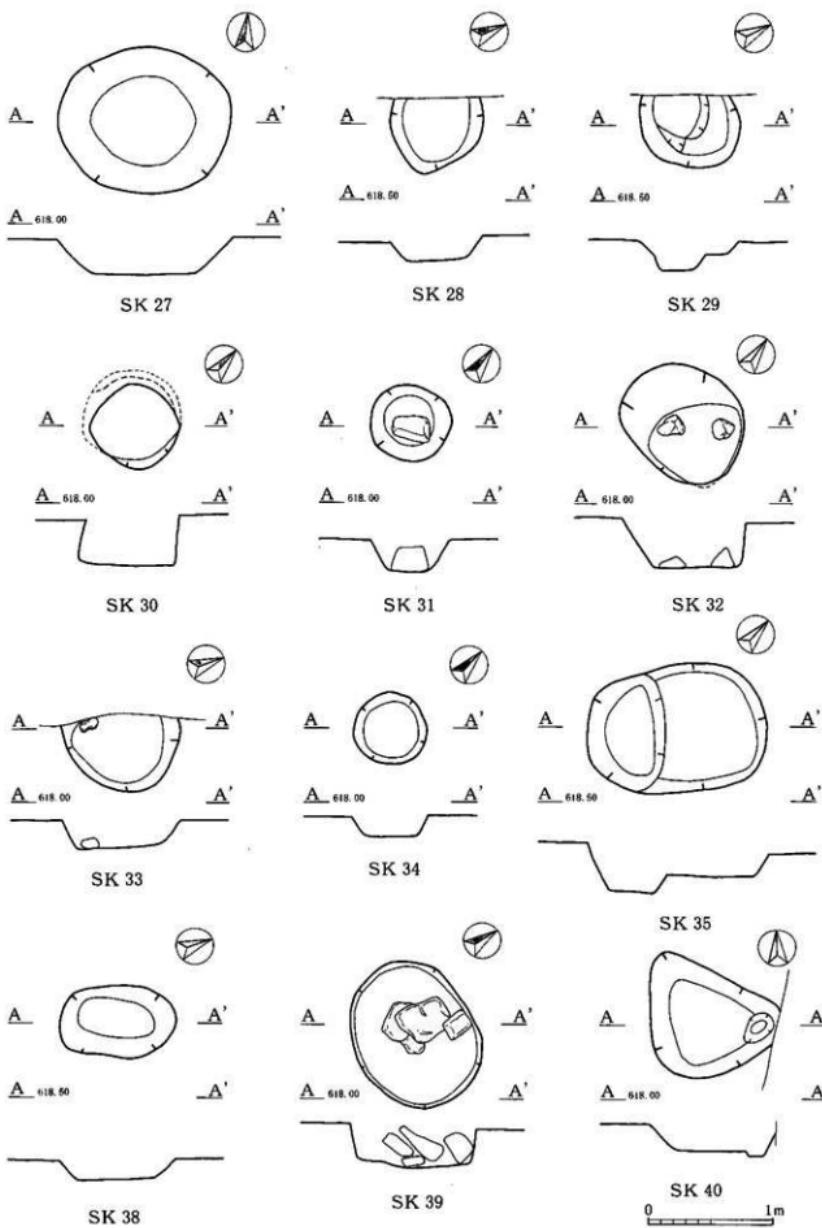
時期は出土遺物より縄文時代中期後葉が想定される。



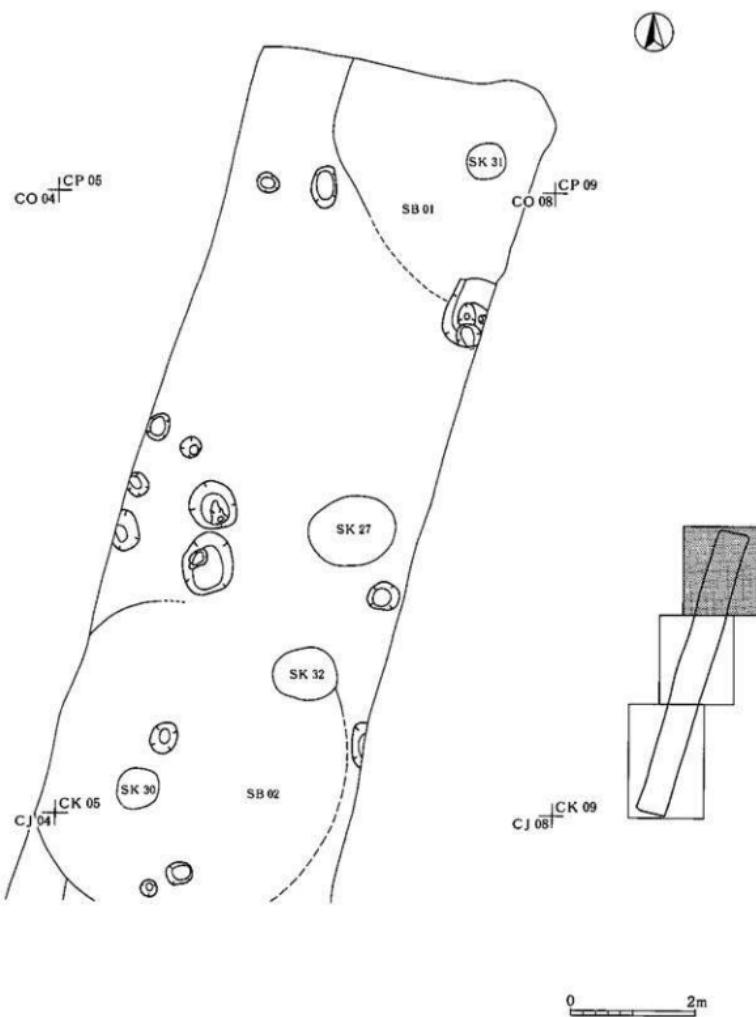
挿図9 SK37

表1 土坑 (SK) 観察表

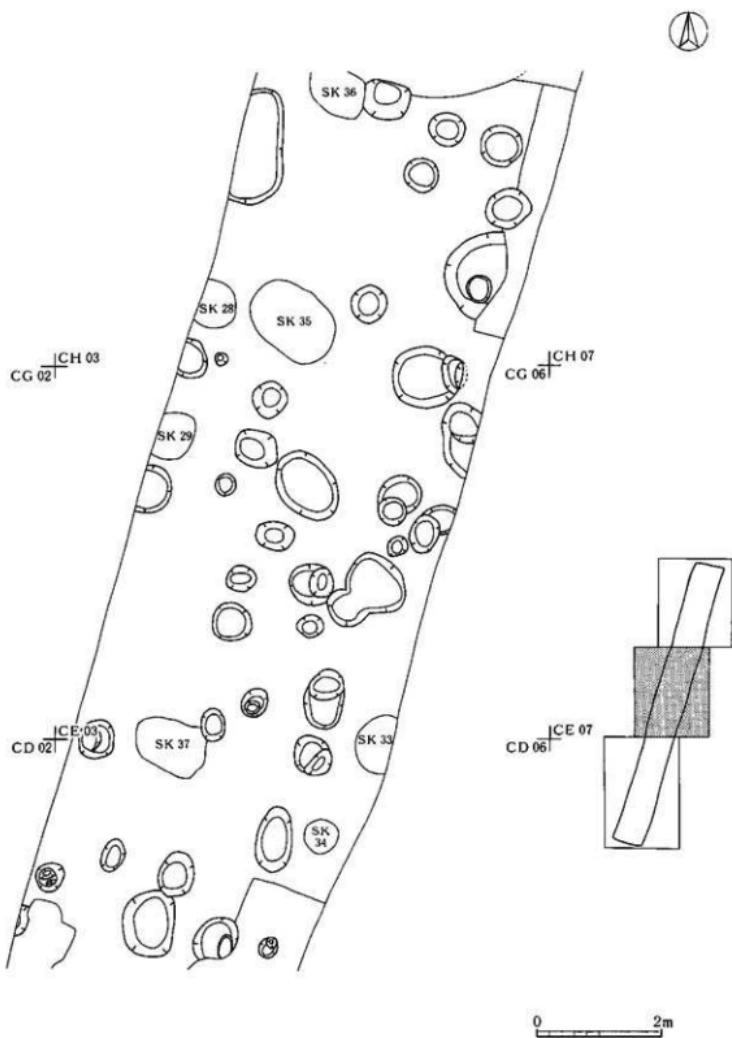
土坑No.	挿図No.	検出位置	長径×短径×深さ (cm)	平面形	備考
SK 27	挿図10	CM 07	140 × 115 × 30	橢円形	縄文中期中葉
SK 28	挿図10	CH 04	74 × (60) × 19	円形	縄文中期中葉
SK 29	挿図10	CG 04	80 × (55) × 30	円形	縄文中期後葉
SK 30	挿図10	CK 05	73 × 65 × 37	円形	縄文中期後葉
SK 31	挿図10	CP 08	63 × 58 × 21	円形	縄文中期後葉
SK 32	挿図10	CL 07	103 × 90 × 44	橢円形	縄文中期後葉
SK 33	挿図10	CE 05	95 × 63 × 29	円形	縄文中期中葉
SK 34	挿図10	CD 05	58 × 58 × 17	円形	縄文中期後葉
SK 35	挿図10	CH 05	145 × 100 × 41	橢円形	縄文中期後葉
SK 36	—	CJ 05	93 × 75 × —	橢円形	縄文中期後葉
SK 37	挿図9	CD 03	118 × 80 × 22	橢円形	縄文中期後葉
SK 38	挿図10	DX 02	93 × 55 × 16	橢円形	縄文中期後葉
SK 39	挿図10	DV 02	120 × 100 × 35	橢円形	縄文中期後葉
SK 40	挿図10	DT 02	(110) × 73 × 16	不整形	縄文中期中葉



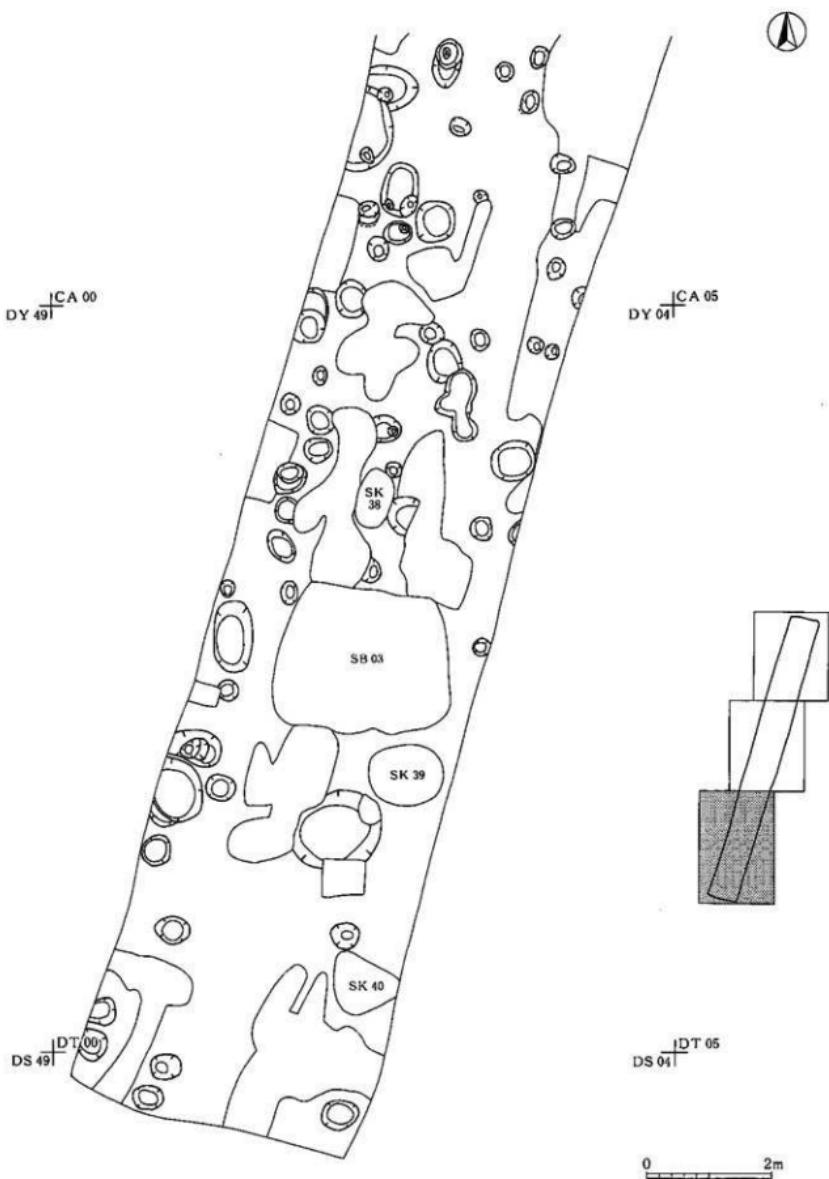
挿図10 SK27~35・38~40



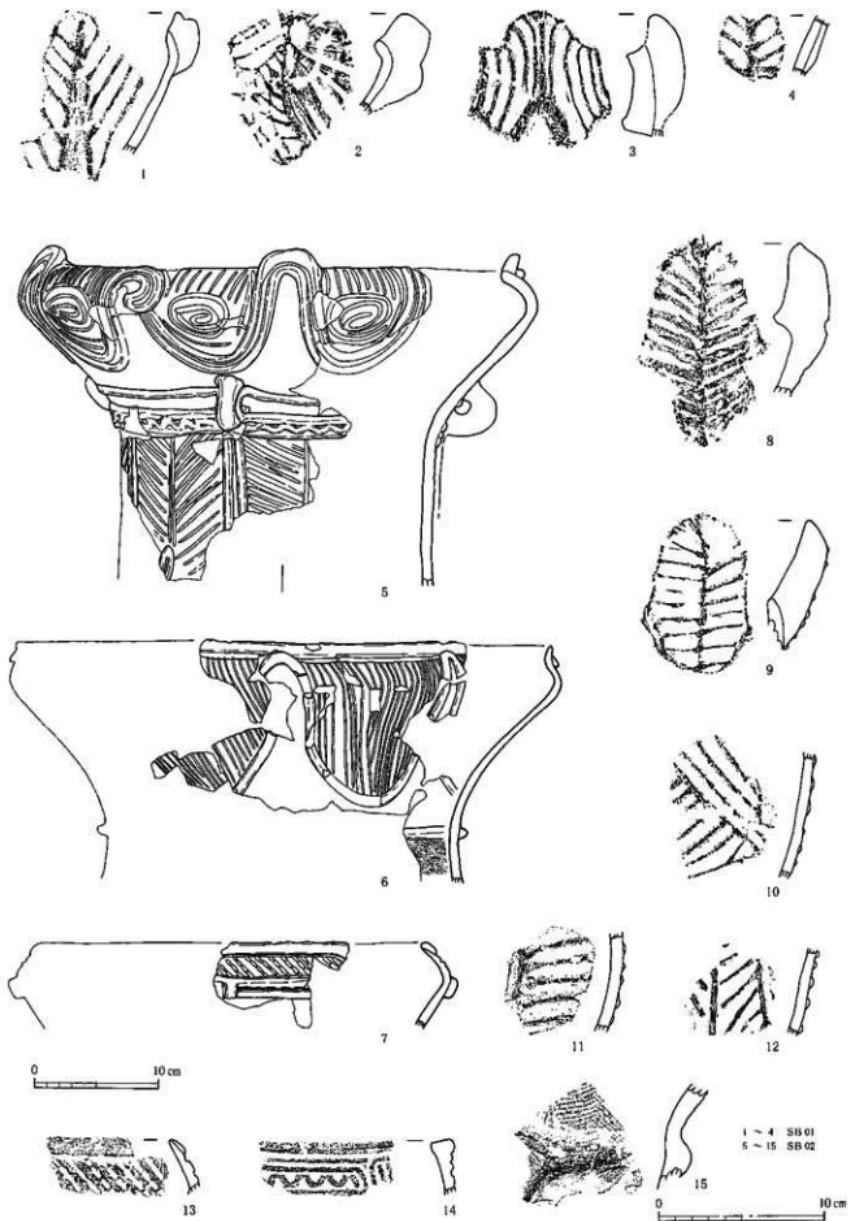
挿図11 周辺ピット1



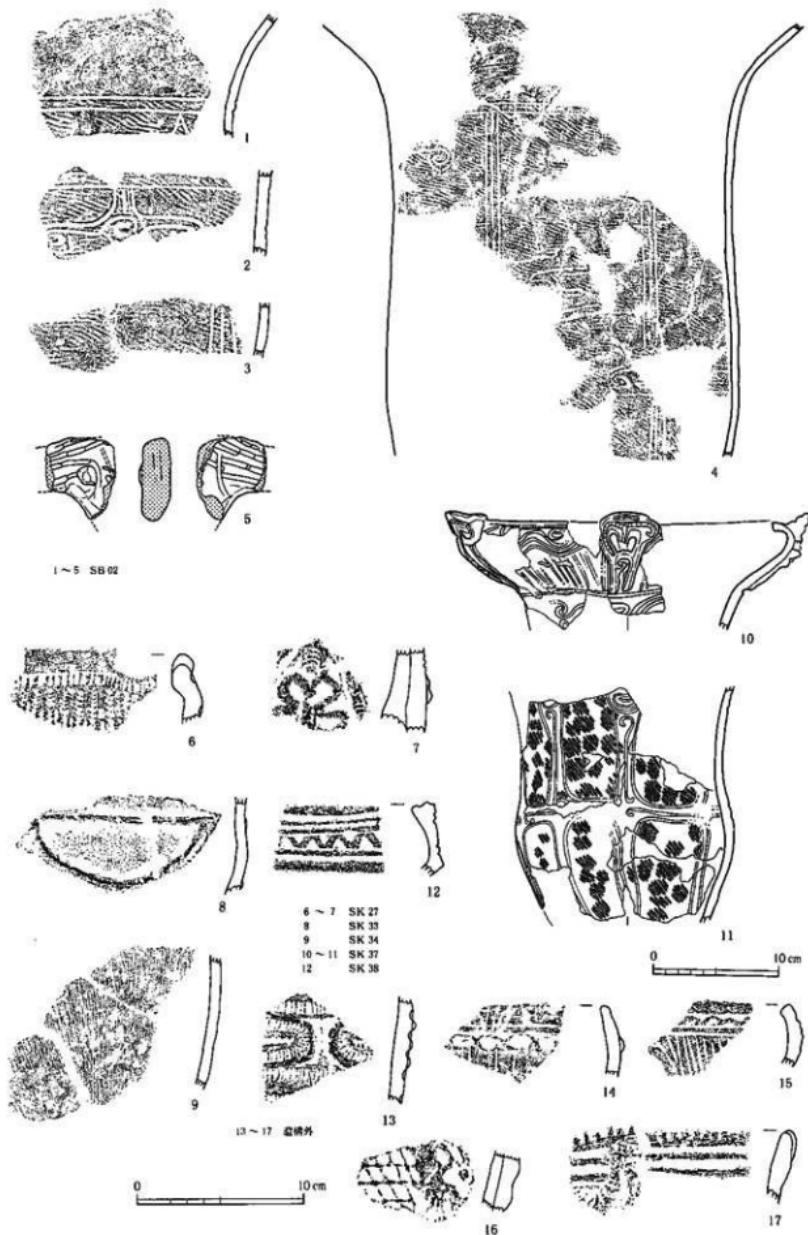
挿図12 周辺ピット2



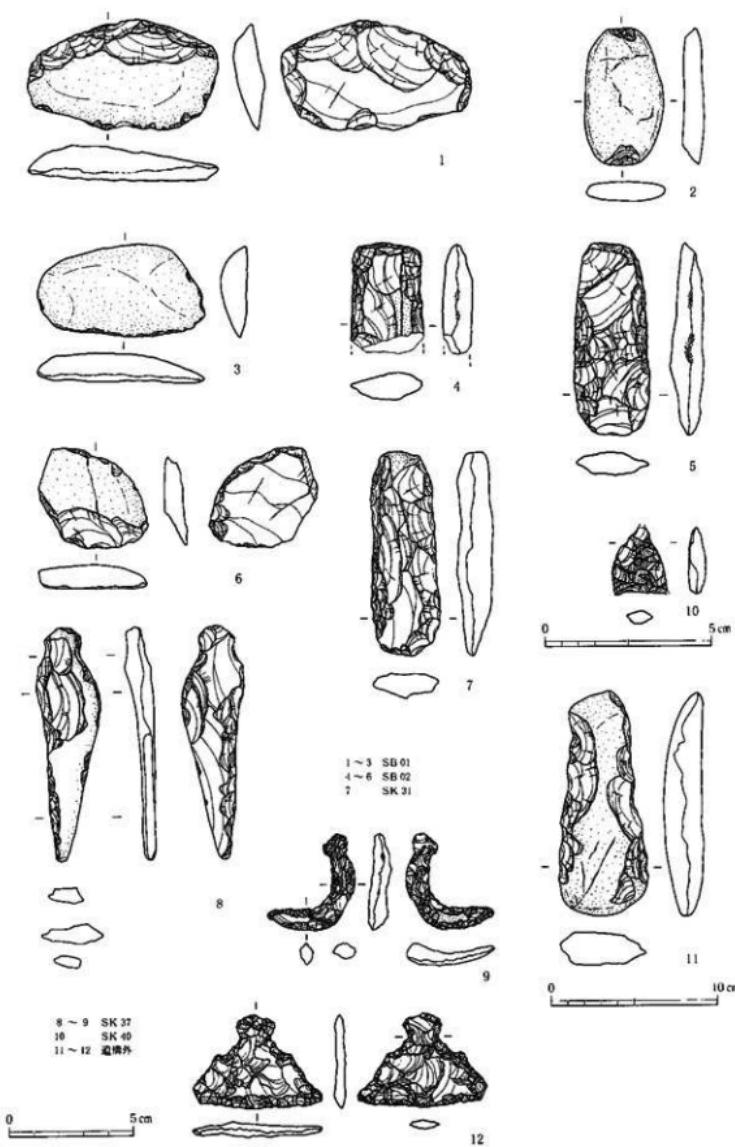
挿図13 周辺ピット3



挿図14 SB出土 土器



挿図15 SB・SK・遺構外出土 土器



挿図16 SB・SK・遺構外出土 石器

## 第4章 まとめ

今次調査は市道新設に伴う発掘調査であり、遺跡の広さから考えれば限られた範囲での調査であった。しかし、前回の平成4年・5年度に実施した発掘調査ではその様相が不明であった縄文時代中期について、遺構が調査されて該期集落の一部が確認されたことは大きな成果といえる。調査された遺構数は多くはないが、当地域の縄文時代中期を考える上で特徴的な遺構・遺物が出土しており、これらの遺構・遺物にふれることで今次調査のまとめとしたい。

### 第1節 石匙を伴う土坑37

今次調査において石匙を伴う縄文時代中期後葉の土坑が1基確認された。土坑37（SK37）であり、底部付近より黒曜石製の石匙1点（挿図16-9）、緑色岩製の粗製石匙1点（挿図16-8）、縄文時代中期後葉の深鉢1個体（挿図15-10・11）がほぼまとまった状態で出土している。黒曜石製の石匙はつまみ部分から「し」字状に延びる縦型で細身の形状を示し、細かな調整がみられるものである。緑色岩製の石匙は、つまみ部分から直線状に延びる縦型で細身の形状を示すものである。深鉢は所謂「下伊那タイプ」と呼ばれる伊那谷南部を中心に分布する縄文時代中期後葉の土器である。

この土坑37と同様に石匙を伴う土坑が出土している市内の遺跡としては、「増泉寺付近遺跡」（飯田市教委 1996）「富の平遺跡」（飯田市教委 1996）「黒田大明神原遺跡」（飯田市教委 1999）「城陸遺跡」（飯田市教委 2003）が挙げられる。増泉寺付近遺跡では縄文時代中期後葉の土坑200から赤色チャート製の石匙が1点出土しているが、形状・調整などの点で他に類をみない優品である。富の平遺跡では縄文時代中期初頭の土坑42・土坑64の2基、黒田大明神原遺跡では縄文時代中期中葉の土坑277からそれぞれ石匙が出土している。増泉寺付近遺跡や黒田大明神原遺跡の土坑は居住域の内側と思われる地点で確認されており、土坑墓的な性格が想定される。城陸遺跡は市内では調査事例が少ない縄文時代中期中葉期の集落遺跡であり、居住域の内側に土坑群が形成されている典型的な環状集落である。それらの土坑群には坑に蓋をするかのような礫を伴うもの、礫の上に石器を置いたもの等がありその特徴的な出土状況から土坑墓群と考えられている。そのような土坑群の中でも土坑20、土坑37、土坑42、土坑50、土坑55は石匙を伴う土坑であり、それらの土坑内からは石匙の他にも打製石斧、土器、礫等が出土しているものもある。また、土坑37は覆土内から出土した磨石の上に添えられたような状態で石匙が出土しており特筆される。

「石匙」は一般的に皮剥ぎ、ナイフ的機能を持つ石器とされ、つまみ部分に紐の付着例が確認されているものもあることから携帯する道具としても想定されている。このような個人装備品としての性格が強い石匙と深鉢を伴う土坑37は土坑墓としての性格が想定され、遺物は出土状況から見て副葬品である可能性が考えられる。上述した各遺跡の土坑は直径が1m～1.5mぐらいのものと1m未溝のものに大別され、ほとんどの平面形態は円形に近い形を呈している。富士塚遺跡の土坑37は前者に含まれるものであり、これらの様相が当地域における縄文時代中期における土坑墓の一形態を示していると考えられる。土坑墓についてはまだ不明な部分が多く、今後のさらなる類例增加を待って詳細な検討をしていく必要がある遺構である。

## 第2節 集落の様相

富士塚遺跡においては、今次調査地点西側で平成4・5年度に圃場整備に先立つ発掘調査（飯田市教委 1996）が実施されており、縄文時代後期の土坑群や中近世を主体とする建物址、ピット群が確認されている。それゆえ今次調査地点周辺でも何らかの遺構が存在する可能性が予想されていたが、今回の調査では縄文時代中期中葉から後葉にかけての住居址・土坑群・中近世の方形竪穴が確認された。

今回も含めてこれまで遺構が確認された地点は、西から東へ向かう小規模な畝上台地上に位置している。縄文時代についていえば、今次調査地点周辺が中期中葉から後葉にかけての集落域と考えられ、台地の北側を中心に居住域が想定される。今回の調査では住居址2軒の確認はあるが、調査区に隣接する西側の農地からは該期の土器片等が数多く採集されており、さらなる集落域の広がりが予想される。また、その南側では前述したSK37が検出されており、広場もしくは墓域として利用されていた可能性が想定される。さらに、台地の西側では前回の発掘調査で縄文時代後期と思われる土坑が幾つか調査されしており、周囲に該期の集落の存在も予想される。

縄文時代以降については中世以降と思われる遺構の存在が注目される。該期の遺構は前回の調査でも多数の小柱穴群や遺物が確認されており、集落の存在が想定されているが、今次調査においても方形竪穴と思われるSB03や調査区全域から柱穴と思われるピット群が検出された。遺跡周辺でも西側の山麓部に近い富の平遺跡において中世の建物址群の存在が確認されており（飯田市教委 1996）、該期における集落の立地については天龍川周辺の段丘部だけではなく、当地のような標高の高い山麓部においても積極的に集落が展開していたことが想定される。

## 第3節 おわりに

今回の調査では上述のとおり富士塚遺跡内で初めて縄文時代中期の住居址を確認した。周辺の状況を考えれば集落域はさらに広がるものと思われるが、地域の歴史を考えるうえで大きな成果が得られた。現在、調査区周辺は農地として利用されているが隣接地域では宅地化が進んでいる。それ故、今後も文化財保護の本旨に沿った、たゆまぬ努力が必要とされる。また、発掘調査にあたり関係機関・伊賀良地区の方々ならびに調査に携わった方々には多大なるご理解、ご協力をいただいた。文末ではあるが記して感謝する次第である。

### 〈参考文献〉

- 鈴木 道之助 1991 『石器入門事典 縄文』柏書房  
戸沢 充則 編 1994 『縄文時代研究事典』東京堂出版  
飯田市教育委員会 1996 『増泉寺付近遺跡・三尋石遺跡 三尋石（II）遺跡 富士塚遺跡 富士塚（II）遺跡・富の平遺跡』  
飯田市教育委員会 1999 『黒田大明神原遺跡II』  
飯田市教育委員会 2003 『城陸遺跡』  
吉川 金利 2003 「下伊那縄文中期後葉に於ける土器様相と編年」長野県考古学会誌102  
小林 達雄 編 2008 『総覧 縄文土器』㈱アム・プロモーション



調査区全景（北側）



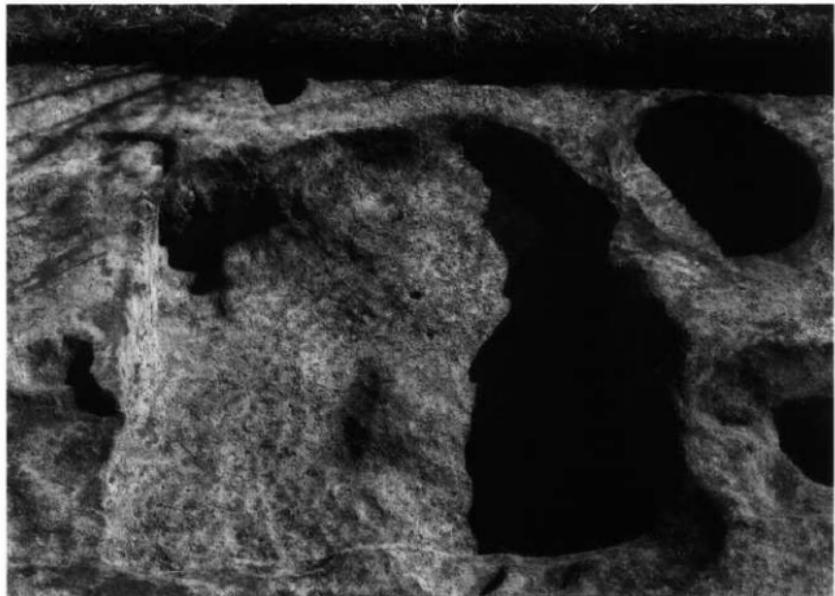
調査区全景（南側）



SB01



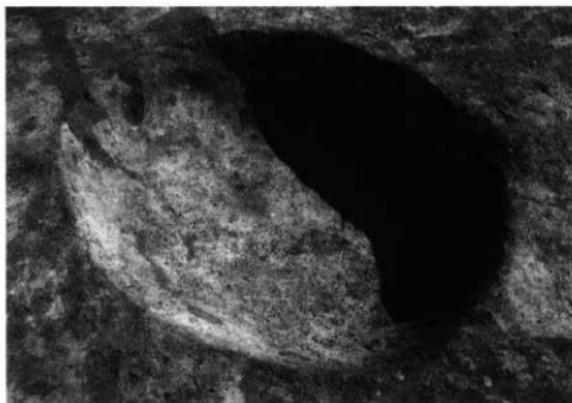
SB02



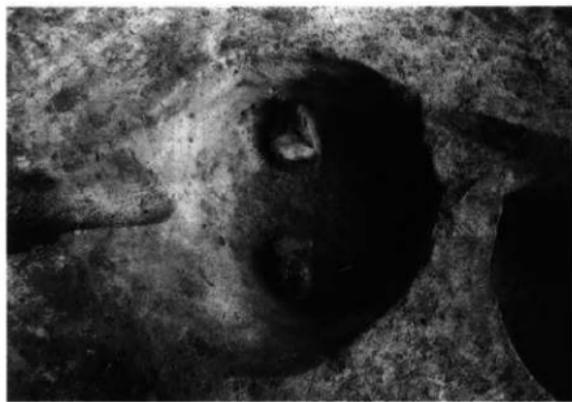
SB03



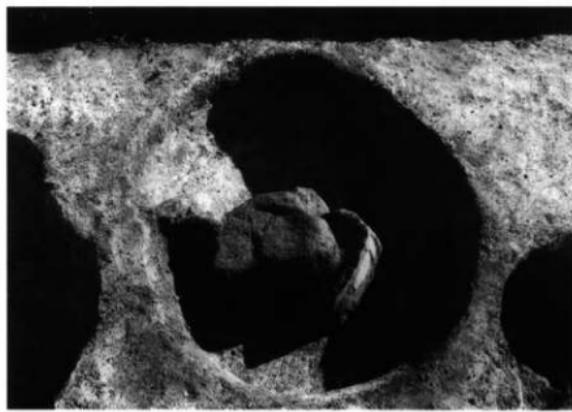
SK37



SK27



SK32



SK39



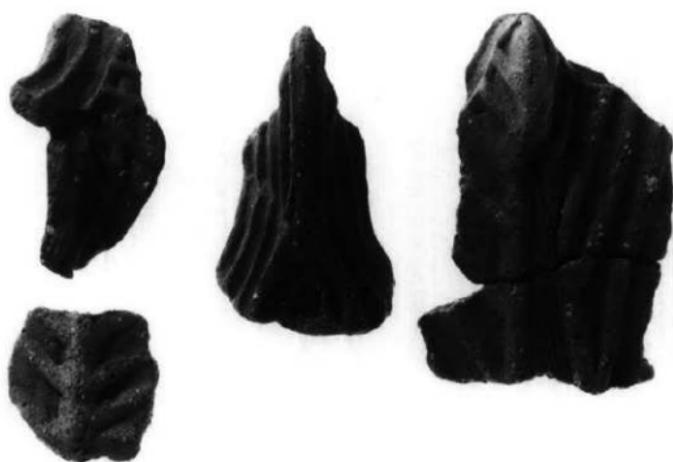
重機作業



調査風景



調査風景



SB01



SB02



SB02



SB02

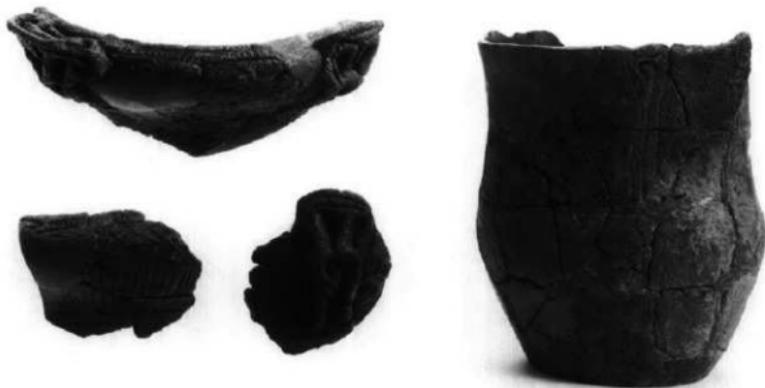
SB02



SK27



SK37



SK37

SK37



遺構外

SK37



遺跡内出土石器

## 報告書抄録

ふりがな	ふじづかりせき						
書名	富士塚遺跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
編著者名	坂井勇雄						
編集機関	長野県飯田市教育委員会						
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地 Tel.0265-22-4511						
発行年月日	西暦2010年3月19日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ふじづかりせき 富士塚遺跡	いいだしおおせき 飯田市大瀬木	20205	35° 29' 36"	137° 46' 54"	平成20年 11月17日 ～ 平成20年 12月26日	230 m <sup>2</sup>	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
富士塚遺跡	集落	縄文時代 中世以降	竪穴住居址 土坑	縄文土器 石器	縄文時代中期中葉末から後葉にかけての集落の一部を調査		
要約	縄文時代中期中葉末から後葉前半にかけての竪穴住居址、土坑群が確認された。土坑の中には土器、石匙を伴う土坑墓と思われる遺構が出土している。						

---

## 富士塚遺跡

2010年3月19日 発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534

飯田市教育委員会

印 刷 杉 本 印 刷 株 式 会 社

---

